

校長室だより

共学共高

第
50
号

令和5年6月9日発行

発行責任者

白梅学園高等学校長

武内 彰

教育実習生の研究授業 part3

引き続き、教育実習生の研究授業の様子を紹介させていただきます。

2年4組の「論理国語」の授業である。2年4組は前日の合唱コンクールで学年第2位に入賞したクラスである。実習生は授業の冒頭でそのことに触れる。生徒たちも手応えを感じている様子である。扱う教材は、鈴木孝夫氏の「相手依存の自己規定」である。日本の中高生の「自分の心をすっかり打ち明けられることのできる相手が誰もいない」という悩みに対して、アメリカの大学院生が「本当に大切なことは、つまり個人が個人である部分は、誰にも明かさないと考える、その対比を通じて「自我の違い」を考えさせる授業だ。導入として、本文の形式段落①から④までをペアで朗読して、内容確認をする。続いてホワイトボードに表示されたスライドをもとにして、形式段落①から④までに延べられていることは「具体例」であることを確認する。次に、日本の中高生は何に悩んでいるのかペアで確認し、実習生が指名して回答させる。生徒たちは中高生の抱える悩みをノートテイクし、それらが「孤独」とくくられることを実習生が確認する。一方、アメリカの大学院生が「悩みを打ち明けられない理由」をペアで話し合う。その後、実習生が指名して生徒が回答する。日本の中高生の悩みとアメリカの大学院生の考えが、「対比」の関係にあることを確認する。

続いて、形式段落⑤から⑧までをペアで音読する。その後、スライドを使って「日本人が秘密を黙ってられない」理由について確認する。このあたりのところは、生徒たちに考えさせて引き出せるとより良い授業になる。最後に「自我とは何か」をペアで確認する。日本人の自我の構造は、「他者を基準にして自分が何者であるかを考える」ことにあるという筆者の主張を確認する。これがどういうことなのか、生徒にとって身近でわかりやすい具体例まで考えさせて、その内容に触れることができると、なおよかったのではないだろうか。ペアワークをふんだんに取り入れ、生徒たちの活動を大切にしている点は、立派である。青年期を生きる生徒たちにとって、なかなか面白い教材ではないか、感じた。



次に、1年1組の「数学A」の授業である。単元名は「組合せ」である。数学の授業実践としてはめずらしく、スライドを提示して進めていくスタイルである。授業の冒頭に書き込み式のプリントが6枚配布され、スライドに「今日の目標」が提示される。小学校ではよくあることだが、この目標を提示することによって、この授業で何ができるようになれば良いのか共有されることは、いいことだ。続いて問題が提示される。「A,B,C,D,Eの5人から異なる3人を選んで組をつくる時、その組をすべて書き出し、全部で何通りあるか考えよう」というものだ。生徒たちは4人程度のグループとなり、机を合わせて共に考える。一定の時間が経過したところで、実習生がいくつかのグループを指名して答えさせる。実際にどのような組となるのか、スライドに提示して回答を確認する。これまで順列を学んでいるので、 $\{A,B,C\}$ と $\{A,C,B\}$ は異なる組と考えてしまいがちだが、これらは同じ組であると考えなければいけない。

次の問題が示される。「今度はA,B,C,D,E,Fの6人から異なる2人を選んで組をつくる場合である。」生徒たちはグループで考え、正解を導き出していく。ここでもいくつかのグループから結果を発表してもらい、実習生がスライドで解説をしていく。扱う数が多くなれば、書き出して何通りあるのかを求めるのは至難の業である。それゆえ、異なる n 個のものから異なる r 個を取り出してつくる組合せを求める方法を実習生が解説していく。それに基づいて、個人で組合せを求める練習問題をいくつかこなしていく。

その後、まとめや補足、宿題の問題が示される。生徒のグループ学習をうまく取り入れているのはいい点だ。そこで出てきた考え方を代表生徒に説明させるなど、表現させる場面がでてくると、より良い授業になるだろう。

教育実習生たちの頑張りは、生徒たちに受け止められている様子だ。(つづく)



(共学共高とは：本校のディプロマポリシー（育てたい生徒像）の一つで、「共に学び、共に高め合う」生徒の姿を表す)